

Title	ルー・フォン・ザロメ事件の真相究明の試み
Author	仲原, 孝
Citation	人文研究. 67 卷, p.37-57.
Issue Date	2016-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	湯浅恭正教授：美濃正教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

ルー・フォン・ザロメ事件の真相究明の試み

仲 原 孝

フリードリヒ・ニーチェとルー・フォン・ザロメとの間に起こった一連の有名な事件は、ニーチェが『ツァラトウストラ』を執筆する直前の時期に起こっており、この事件を単なる恋愛スキャンダルと見なしているかぎり、『ツァラトウストラ』の思想的に理解することはできない。本論文は、この事件を伝える原資料を根本的に再検討することを通じて、この事件に関する一般的理解を覆し、次の結論を導き出す。1.ニーチェがルーに求婚したという事実は存在しない。2.ニーチェとの交際に関するルーの証言は、一般的に信憑性が低い。3.ニーチェはルーに永遠回帰思想の相続者であることを期待した。4.ニーチェとルーが決裂した原因は、ルーがニーチェに対して永遠回帰思想を嘲笑する意味の発言をしたことにある可能性が大きい。5.ニーチェが求婚したとルーが強固に主張するのは、自分の思想的力量よりも女性的魅力の方が価値が高いと見なす彼女の価値観の表われである。最後に、以上の結論に基づいて、ルー事件が『ツァラトウストラ』の超人思想を生み出す重要な前提条件となったという見通しを提示する。

序論

フリードリヒ・ニーチェとルー・フォン・ザロメとの間に起こった一連の有名な事件（以下「ルー事件」と呼ぶ）は、ほとんどの場合に単なる恋愛スキャンダルとしか見なされていない⁽¹⁾。しかし、ニーチェの心に二度と消えることのない深い傷を刻みつけたこの事件は、ニーチェが『ツァラトウストラ』を執筆する直前の時期に起こっており、この事件がニーチェにいかなる影響を与えたかを解明することは、『ツァラトウストラ』の理解にとって、したがってまたニーチェ思想全体の理解にとっても、決定的に重要な前提条件とならなければならない。

しかし、そのためにまず必要となるのは、ルー事件の客観的真相を可能なかぎり正確に明らかにしておくことである。というのは、一般にこの事件の経緯として描かれているストーリーには、いくつもの不可解な点があり、それをそのまま事実と認めることはできないからである。本論文は、まず1.章で、一般に事実と認められているルー事件の顛末を簡潔に回顧した上で、2.章において、そこに見出される疑問点の数々を指摘する。そして3.章において、この疑問をひとつずつ解決していきながら、ルー事件の真相を可能なかぎり明らかにすることを試みる。本論文での究明の結果を背景として『ツァラトウストラ』の思想の意義を解明することは、紙幅の制限のゆえに別の機会に譲らざるをえないが、本論文末尾の4.章において、その大まかな方向性については示唆されるであろう。

1. ルー事件の顛末に関する通説

大半の伝記が伝えているルー事件の顛末の大筋を取り出せば、以下のようになる。

フランス系ロシア人貴族ギュスターヴ・サロメ (Gustav Salomé) の末娘であったルイーズ・サロメ (Louise Salomé. "Lou" は洗礼名だが一般にはこちらの名で呼ばれている) は、チューリヒ大学で学んでいる途中で肺病を発症し、指導教授に南国での静養を薦められて、1882年2月(21歳)に母親とともにローマへ移住した。ここで彼女は、かねてからこの地で生活していたマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークを中心とする知的サークルに加わる。ルーの驚くべき才能はすぐにメンバーの驚嘆の的となり、マイゼンブークは友人の一人であったニーチェにも彼女と会わせようと画策した。同じくサークルのメンバーであり、ニーチェの友人でもあったパウル・レー⁽²⁾も、ルーと会うことを強く薦める手紙を、当時ジェノヴァに滞在していたニーチェに送っている。

興味を抱いたニーチェは、1882年4月24日、ローマを訪れた。彼とルーとの最初の出会いはサン・ピエトロ大聖堂の中でのことで、彼が彼女にむかって発した最初の言葉は、「どんな星の導きで私たちはここで出会ったのでしょうか？」という、なんともロマンティックなものだった。ここで即座にルーに惚れ込んでしまったニーチェは、自分に代わってパウル・レーに意思を伝えてもらうという形で彼女に求婚した。ところがルーの方は、パウル・レーとニーチェとの間には純粹に知的な関係だけを求めていたため⁽³⁾、自分には結婚願望がないことなどを理由に丁重に断わった。

その後、ルー母子とニーチェとパウル・レーは、北イタリアのオルタ湖畔を經由してルツェルンへ向かう。このオルタ湖畔で、ルーとニーチェが二人きりで近くのモンテ・サクロへ散歩に出かけたまま異常に長い時間もどってこず、あとの二人の気をもませたことがあった。通説ではこの時、ルーとニーチェは散歩の合間にキスをし、甘い言葉を語り合ったと理解されている。さらに、ルツェルンから(友人のフランツ・オーファーベックに会いに)いったんバーゼルへ行き、再びルツェルンへもどってきたニーチェは、有名なライオン記念碑のある公園でルーと二人きりで散歩していた時に、今度は直接に彼女に対してあらためて求婚し、そして再び断わられた。鞭を持ったルーが乗っている荷車をニーチェが引き、その前にパウル・レーが立っているという珍妙な構図の有名な記念写真は、このルツェルンで撮影されたものである。

この年の7月26日、リヒャルト・ヴァーグナーの最後の作品「パルジファル」がバイロイトで初演された。しかし、すでにヴァーグナーとは決裂していたニーチェは、もちろんこれを聴きには行かず、この初演をはさむ6月末から8月末までの2ヶ月ほどを、バイロイト近郊のタウテンブルクという町に滞在した。この期間を、ニーチェは妹のエリーザベトとルーを招いて三人で過ごしたのだが、この二人の女性だけは、Nの薦めに応じて「パルジファル」の初演を聴きに行った。さて、女性二人で過ごしたこの道中で、ちょっとした事件が起きる。バイロイ

トの社交界でもまたたく間に注目の人となったルーがしばしば尊大な態度をとるのでエリーザベトは頭に来ていたのだが、帰路の中継地イェナで、ついにこれが爆発したのである。イェナで立ち寄った知人のゲルツァー夫妻の家で、既述の「破廉恥な」写真を見せびらかしてニーチェとの関係を自慢するルーに、エリーザベトが抗議して兄を聖人君主のように賞賛すると、ルーはこれをあざ笑い、聞くに堪えない悪罵を連ねてニーチェをののしった。たまりかねたエリーザベトはその場で嘔吐して倒れてしまい、全身湿布によってかろうじて回復したという。

タウテンブルクでの滞在中は、女性二人の小旅行中を除き、ニーチェとルーは毎日深夜まで二人きりの親密な時を過ごした。最初はこの二人の関係について好意的だったエリーザベトは、この嘔吐事件以後は一転してルーの仇敵となり、彼女がニーチェの目の届かないところではいかにニーチェを侮辱する言動をとっているかを兄に訴えた。これによって、ルーの誠実さに対する疑念がニーチェにも芽生え始めるのであるが、しかし彼はこの疑念をあえて封印してルーとの親密な関係を維持した。

しかし、こうしてかろうじて維持されてきた関係も、1882年11月、ついに破局を迎える。ルーの説明によれば、ニーチェはルーにむかって、パウル・レーの印象をそれとなくおとしめることによって自分の印象を高めようとするのがしばしばあり、そういう態度を何度も見ているうちに我慢できなくなって、ルーはニーチェとの交際を絶つことにしたのだという。ニーチェは一時は自殺すら真剣に考えるほどどん底まで絶望したと言われている。

2. 通説への疑問

ルー事件を以上のように理解する通説は、もう少し立ち入って資料を検討してみれば即座に露呈するいくつもの不可解な問題をかかえている。以下、それらを順に指摘してゆく。

2.1. 「どんな星の導きで……」という言葉

ニーチェはルーに実際に会う1ヶ月ほど前に、彼女の方もまたニーチェと強く会いたがっていることを伝えたと思われるパウル・レーの手紙（現存せず）に対して、次のような返信を書き送っている。

そのロシア人女性に、私からよろしくと伝えてください。もしそれに何らかの意味があるならば、の話ですけれどもね。私はこういう種類の魂に欲情しています。いやそれどころか、私は近々、それを強奪しに行きます——私がこの先10年の間にしようと思っていることに関連して、私はそういう魂を必要としているのです。結婚はまったく別の問題です——私はせいぜい、2年間の結婚にしか同意できないでしょう。しかもそれは、私がこの先10年の間にすべきことに関連するかぎりでのみのことなのです（1882/3/21, KSB 6: pp.185-186）

「もしそれに何らかの意味があるならば」という投げやりな表現は、ニーチェがルーとの出会いに大した期待を抱いていないことをはっきりと示している。のちほど(3.3節)もう少し詳しく検討するが、彼がここで「この先10年の間にしようと思っていること」と言っているのは、前年8月に彼が着想を得た永遠回帰思想を著作にまで仕上げる作業のことを意味している。思想的作業の必要性(例えば常に身近にいる助手の必要性)のための結婚ならともかく、通常の恋愛感情に基づく結婚などするつもりはない、と言っているのは、ニーチェの本心を語ったものと考えてよい。そう判断する根拠を以下に挙げよう。

女性に対するニーチェの極端なまでの性的無関心は、すでに学生時代から周囲の好奇の目を引くほどであった。ライプツィヒ大学時代の学友であったヴィルヘルム・ロツシャーは、ニーチェが性的関係についてはまるで「聖者」のようだと友人のみんなから言われていたこと、酒も煙草もほぼ完全に無縁だった彼の唯一の贅沢は、毎日、喫茶店兼菓子店(Konditorei)に行っただけでコーヒーかココアを飲みながらケーキを食べることだったということを、回顧している(FNChrBT, p.145)。ニーチェの後半生の最も重要な友人であり助手であったハインリヒ・ケーゼリッツもまたガールフレンドに宛てた手紙で、どこまでも結婚を拒否するニーチェのことを「最も厳粛な意味での聖者」と呼び、もし君がこういう言い方を馬鹿馬鹿しいと思うとしたら、それは君がこういう人間に会ったことがないからにすぎないのだ、と書いている(Briefe Gasts: p.338)。ニーチェがあまりにも恋愛や結婚に無関心なのを異常だと感じたヴァーグナーは、ニーチェの主治医のオットー・アイザーに、彼の病気の原因は彼の男色趣味にあると考えるべきだと忠告したことがある(Westerhagen 1956: pp.527-529)。

そればかりではない。ニーチェが『反時代的考察』執筆前後の時期(1873年頃)から、極端な視力低下、激しい眼痛・頭痛・嘔吐、といった症状にたえず苦しめられ、やがて大学で授業もできなくなって、結局1879年にバーゼル大学を辞任することを強いられたのは周知のとおりである。激務から開放されても症状はかえってひどくなる一方で、1880年には主治医のアイザーへの手紙で最悪の病状を訴えている。「不断の痛み、一日に何時間も船酔いによく似た麻痺に近い感覚、そういう時には話すことも困難になり、時に入れ替わりに激的な〔頭痛の〕発作(この前の発作の時には、3昼夜にわたって嘔吐しつづけました、私は本当に死にたいと思いました)。読むこともできません! 非常に稀にしか書けません! 人とも交われません! 音楽を聴くこともできません! ただ一人でいて、散歩をしています」(KSB 6: p.3)。ルーに出会う直前の時期にも、こうした状態は基本的には変わっていない。「この季節は私の健康には向いていません。最近の発作では信じがたい量の胆汁を嘔吐しました」(1882/3/4, KSB 6: p.175)。「私の病気の直近の発作は完璧に船酔いと同じでした。目覚めるとまだ生きていた私は、静かな聖堂広場〔に面した部屋〕で小さいベッドに横たわっていました」(1882/4/1, KSB 6: p.188)。

こんな激しい病苦の中で、生きつづけることにすら困難をきたしている人物が、恋愛に熱

を上げている余裕など持たないのは当然である。しかも既述のように、ニーチェは若い頃からそもそも女性全般に対する性的関心を欠いているのである。彼がルーに会う前には彼女に対してきわめて投げやりな関心しか表明していないのは、単なるポーズなどではなく、彼の本心を表わしたものである。その彼が、ルーに顔を合わせた途端いきなり、「どんな星の導きで私たちはここで出会ったのでしょうか？」(Von welchen Sternen sind wir uns hier einander zugefallen? LAS: p.80) などという、プレイボーイさながらの甘い言葉でルーの気を惹こうとするなどということが、はたしてありうることだろうか。自分たちの出会いは星々の定めた運命なのだという言い方は、自分たちの関係を妨げることは誰にもできはしないのだということを含意しており、まさしく恋人に囁きかけるのにふさわしい言葉である。こんな言葉を、ニーチェは本当に語ったのだろうか。

2.2. パウル・レーに仲介を頼んだこと

仮に百歩譲って、それまで病苦にあえぎ、女性にまったく関心を持たなかったニーチェも、ルーに会った瞬間に彼女の放つ魅力に完全に呪縛されてしまい、結婚を渴望するようになった、と考えるとしよう。ルーの自伝によれば、ニーチェの求婚は最初はパウル・レーを「口利き」「仲介者」(Fürsprecher, LAS: p.80) として行なわれたという。

さて、前節で引用されたパウル・レー宛の書簡でニーチェは、「結婚はまったく別の問題です——私はせいぜい、2年間の結婚にしか同意できないでしょう」と書いていた。前節で示されたように、この時点ではルーに対してきわめて投げやりな関心しか持っておらず、したがって、彼女と結婚する気がないことは自分にとつてはあらためて言う必要もない自明なことであったにもかかわらず、ニーチェがここで彼女と結婚する気はないことをわざわざ強調しているのは、パウル・レーの側にルーに対する結婚願望があることをすでにニーチェが知っていたから以外ではありえない。僕がルーに実際に会うことになっても、僕が君の恋敵になる心配など無用だよ、僕は恋愛や結婚になど何の関心も抱いていないのだから、というわけである。ニーチェはルーと親密な関係を持つようになった後でもなお、パウル・レーの結婚願望を認識し、かつ承認している旨を明言している。

ついでながら、もし彼女〔ルー〕と結婚するならレーがするべきだったでしょう(彼女の置かれている状況がもつ色々な困難を除去してやるためにです)。私の方は、心から励ましを惜しみません。(an Meysenbug, 1882/7/13, KSB 6: p.224)

不可解なのはここである。いかにニーチェが世間知らずとはいえ、パウル・レーがルーと熱烈に結婚したがっていることをすでに十分に知りながら、よりによってほかならぬそのパウル・レーに自分の求婚の「口利き」を頼んで、自分の意思が正しくルーに伝わると信じるなど

ということが、はたしてありうるだろうか。ニーチェが本気でルーと結婚したいと思っているなら、むしろパウル・レーの知らないところでこっそりと求婚するはずではないだろうか。

2.3. モンテ・サクロでのキス

モンテ・サクロでニーチェとルーがキスをしたという、今ではどんな伝記でもとりあげている有名な逸話は、じつはルーの自伝の編集者が注記に記載している小さい記事が唯一の典拠となっているものである。

その〔モンテ・サクロでの〕時のことについて話している途中で、ルー・アンドレアス＝ザロメは、微妙な、ほとんど困惑したような微笑みを浮かべながら、こう言った。「私がモンテ・サクロでニーチェとキスをしたかどうかなんて——もう忘れてしまいましたわ」(Ob ich Nietzsche auf dem Monte Sacro geküßt habe - ich weiß es nicht mehr.: LAS, p.236)

この一言は、字面上の意味とは裏腹に、明らかにキスを「した」という意味を表わしている(実際にはキスをしなかった人が「キスをしたかどうか忘れた」などと言うはずがない)。晩年のルーは、後に自分の自伝の編集者となる相手に対して、明らかに自分がニーチェとキスをしたと思わせたがっているのである。

さて、不可解なのはここである。ルーは同じ自伝の中で、ニーチェから求婚されて自分が大いに困惑したことを述べている。自分とパウル・レーはニーチェとともに「三位一体」(Dreieinigheit, LAS: p.80) の関係を作ることを求めていたのに、ニーチェが求婚してしまったために自分たちの関係がもつれそうになった、それでパウル・レーと相談し、自分は結婚全般を忌避していること、さらには結婚してしまうと年金が受け取れなくなるという経済的理由もあることなどを語って、ニーチェにわかってもらおうとした、云々 (ibid.)。このように、自分はニーチェに対してあくまで知的な関係しか求めていなかったことを強調しているルーが、他方ではわざわざ恋愛関係を示唆するような発言をしているのは、どういうわけだろうか。「キス」という行為は、(暴力を用いないかぎり) 両者の合意がなければ成り立たないはずの行為である。キスをしたことを匂わせるということは、ニーチェと恋愛関係があったことをみずから認めることに等しいのではないのか。

2.4. 決裂の理由

ニーチェが「それとなく私〔ルー〕に対してパウル・レーの印象をおとしめようとする言動」(solche Andeutungen [...], die Paul Rée bei mir schlecht machen sollten) を繰り返したのに反発して、ルーの方からニーチェとの交際を絶ち、それに対してニーチェが「敵愾心」(Feindseligkeiten) と「憎悪を含んだ非難」(Vorwürfe hassender Art) を浴びせかけてきた、

という、これもルーが自伝で語っている筋書き (LAS: p.85) は、そのまま無批判に信用することはできない⁽⁴⁾。なぜならこの説明は、ニーチェのルー宛書簡の内容と明らかに食い違っており、そのどちらを信用すべきかについての批判的吟味が必要だからである。ルーとの破局直後の1882年11月から12月、ニーチェは彼女とパウル・レーとに対して、非難や怒りの思いを連綿と綴った手紙の下書きを数多く残している (KSB 6: nn.337-341,347-355. この文面の手紙を実際に送ったかどうかは不詳)。その中には例えばこんな文章がある。

愛するルーよ、用心なさい。私が今あなたを退けるのは、あなたの全本質に対する恐ろしい検閲なのでしょ！ [……]

あなたは損害を与えた。あなたは苦痛を与えた——しかも、私に対してだけでなく、私を愛していたすべての人々に対してです。——この剣が、あなたの上に釣り下がっているのです。あなたは私において、最善の代弁者を持っていますが、しかし最も冷厳な審判者をもまた持っているのです！ あなたがあなた自身に有罪宣告を下し、自分で自分の刑罰を定めることを、私は望んでいます。[……]

私は当時オルタで、私の全哲学を初めてあなたに熟知させてあげようという決意を心に決めていました。ああ、それがどれほどの決断だったか、あなたには感知すらできないでしょう。誰に対してであれ、これ以上大きな贈り物ができる人がいるとは、私には信じられません。(KSB 6: n.347, pp.293-294)

ここではニーチェは「私があなたを退ける」と言っており、ルーの側から交際を断ったというルーの説明とは明らかに食い違っている。さらに、もしもパウル・レーを不当に貶めようとするニーチェの態度をルーが非難し、そのように非難されたことに対してニーチェが激怒したのだとしたら、ニーチェのこの怒り方はまるで見当外れなことを言っていることになる。例えば、〈パウル・レーのことをそんなふうに言うのは卑劣です〉と非難する相手に対して、〈私はあなたに私の全哲学を教えようとしたのですよ、それがどれほどの決断だったか、わからないでしょう〉と答える、などというのは、およそ会話として成り立っていない。ということはつまり、この二人の決裂に関するルーの説明は、少なくとも^ニ^ー^チ^ェの^側がなぜルーとの決別を決断したかをまったく理解させてくれない、ということの意味する。ニーチェとルーとはなぜ決裂せざるをえなかったのか、という疑問は、ルーの説明によってはいまだ解かれえない疑問でありつづけている。

3. ルー事件の真相究明の試み

本章では、以上で提示された疑問を順次解いてゆくことを通じて、ルー事件の真相に可能なかぎり肉薄することを試みる。本章での解明によって、ルー事件は通説がとらえているような

単なる恋愛沙汰などではなく、もっとニーチェの哲学の本質に直結する問題をめぐって起こった出来事であることが、見えてくるであろう。

3.1. ニーチェはルーに求婚しなかった

まず最も解答の容易な第2の疑問(2.2節)から考えていこう。パウル・レーがルーと結婚したがっていることを十分に知っているニーチェが、そのパウル・レーに代弁を頼んでルーに求婚することなど、およそありうることではない。ここから導かれる自然な結論は、ニーチェがパウル・レーを仲介者としてルーに求婚したという、ルーが自伝で述べている出来事は、実際には存在しなかった、ということである。

もちろん、これだけの理屈で求婚の事実を否定するのは根拠不十分だ、と反論する人はいるだろう。もうひとつ、ニーチェがルーと結婚する意思を持たなかったことを、彼の親しい友人が証言している文章を引用しておこう。次に引くのは、ニーチェの無二の親友であったフランツ・オーファーベックの妻イダが、後年ニーチェのことを回想した文章である。

彼〔ニーチェ〕は、1882年夏に私の夫に最近の状況について語った時、興奮の絶頂にあり、彼の計画と彼の人生との形成に対して、最大の希望を伴った確信を持っていた。婚姻関係抜きの、精神的に情熱的な関係が、彼の常に好んでいた理想であった。〔……〕彼は、(明らかにルツェルンでの話し合い以前に訪問した際のことだと断わった上で)ローマで彼女にこう言っておいたのた、と言った。「私はあなたを人々の無駄話から守り、これこれでない場合はあなたに私の手を差し伸べる、そういう義務が自分にあると思っています、云々。」彼は、ザロメ嬢がこれを求婚とみなしてしまったのではないかと恐れていた。(強調は引用者、Ida 1908: p.336⁽⁵⁾)

そればかりではない。タウテンブルクでニーチェがルーと毎日深夜まで、二人きりの秘密のつもりで濃密な会話を交わしていた時、じつはパウル・レーとルーはニーチェに内緒で手紙のやり取りをしていた⁽⁶⁾。ニーチェとルーの往復書簡は、お互いを „Sie“ で呼びあい、親愛の念を表わしつつもあくまで友人という一線を越えることは決してないのに対して、パウル・レーとルーはお互いを „Du“ で呼びあい、パウル・レーは彼女を「愛するカタツムリさん」という愛称で呼ぶなど、明らかに恋人同士として会話しあっている。さて、こうしたパウル・レーの書簡の中に、次の文章がある。

まったく奇妙なことに〔merkwürdig genug〕、ニーチェは君がタウテンブルクへ行くことに完全に同意した時、君を自分の花嫁と見なしたようじゃないか？そして、花婿としての資格で、パイロイ卜事件について君を非難したのじゃないか？(LAS: Anm, pp.239-240)

もしパウル・レーが実際にニーチェの求婚の代弁者をつとめたのなら、ニーチェが彼女を「花嫁」と、少なくとも見なした^がっていることは、すでに百も承知のはずである。それを「まったく奇妙なこと」と言うのは筋が通らない。あるいはこれを、「あれほどきっぱりと断わられたのにまだ結婚できるつもりでいるのは奇妙だ」という意味に解するとしよう。一見筋が通るようだが、よく考えてみればこれもおかしい。誰だって、求婚した相手がいったんはきっぱりと断わってきても、夏を避暑地で2ヶ月ほどいっしょに過ごそうと誘ったら大喜びで来たとなったら、「やっぱり気があるんじゃないか」と思うのは自然なことで、なんら「奇妙なこと」ではないからである。パウル・レーのこの一言は、彼がそれまでニーチェとルーとの関係を純粹に知的な関係だと信じていた場合にのみ、意味を成すのである。

ルーの自伝^{以外}の各種の証拠は総じて、ニーチェがパウル・レーを介してルーに求婚したという事実は存在しなかったことを示している。ということはつまり、ルーの自伝は少なくともこの点に関するかぎり、明白に事実に反する記述を含んでいることになる。そして、1回目の求婚についてルーがかくも事実に反する説明をしているとしたら、2回目の求婚についても同様ではないかという疑惑が生じるのは自然である。もちろん、2回目の求婚がなかったことを立証する直接的証拠があるわけではない。そもそも求婚というのは二人きりの状況下で行なわれるものであるから、それについての直接的証言者は当の二人以外にはありえない。我々が確認できる確実な事実は、この点に関するルーとニーチェの発言が完全に食い違っているということだけである。ルーは求婚されたと主張し、ニーチェは自分たちの関係は恋愛や結婚とは無縁だとあらゆる知人に言いつづけている。一対一でなされる通常の求婚の場合なら、一方が求婚の意図なしに語った言葉を他方が求婚と受け取ってしまった、というような行き違いは十分にありえよう。しかし、1回目の求婚に関する二人の発言の食い違いは、そのような主観的な受け取り方の違いによって生じたものではありえない。なぜならこの求婚は、パウル・レーという第三者^を介して行なわれたとされており、そしてパウル・レーがニーチェの求婚の仲介を実際にしたかどうかは、この二人の主観の外部に存在する客観的事実の問題だからである。こういう客観的事実に関してルーの証言が明らかな虚偽を含んでいる以上、2回目の求婚に関しても、ルーよりもニーチェの発言に信憑性を認めるのは当然であろう。以上のような考察から、我々は次の結論を得る。ニーチェはそもそもルーに求婚など一度もしたことはなかった⁽⁷⁾。

3.2. ルーの自伝的回顧の信憑性の問題

以上の考察をもとに、あらためて2章で示された通説への疑問を回顧してみると、ひとつ気づくことがある。それは、これらの疑問がいずれも、ルーの証言の信憑性をめぐる疑問^だということである。重複になるが、問題点を鮮明に取り出すため、ここであらためて回顧しておく。

1. ニーチェがルーに会うや開口一番「どんな星の導きで私たちはここで出会ったのでしょうか？」と言った、と証言している一次資料は、ルーの自伝だけである (LAS: p.80)。こ

れに対し、ニーチェの書簡や、彼の友人たちの証言などの無数の資料は総じて、彼が当時、恋愛に熱を上げている余裕などないほどの病苦にあえいでいたこと、彼が若い頃から一貫して女性全般に対する性的関心を欠いていたこと、そしてルー個人に対してもきわめて投げやりな関心しか持っていなかったことを示している。ニーチェが上記の言葉を本当に語ったのか、という疑問は、その他のあらゆる証言と矛盾するルーの証言にどれほどの信憑性を認めるべきか、という疑問である。

2. ニーチェがパウル・レーを「口利き」に立ててルーに求婚したと述べている一次資料も、ルーの自伝だけである (ibid.)。そして、この証言が明らかに事実と反しており、つまり信憑性を持たないことは、前節で確認されたとおりである。

3. モンテ・サクロでニーチェとルーがキスをしたことを匂わせているのは、ルーの自伝に編者が付した注記に記録されているルーの発言である。そして、この発言に疑問を抱かせるのは、当のルー自身の別の発言、つまり、彼女はニーチェとの間に純粹に知的な関係しか求めておらず、求婚も拒絶した、という彼女の発言である。二つの正反対の趣旨の発言（ニーチェとの恋愛関係を承認する発言と、否定する発言）を行なっている以上、少なくともその一方は信憑性を欠いていることになる。

4. ニーチェとルーとが決裂したのは、ニーチェがパウル・レーをそれとなくおとしめる言動を繰り返したことを責めて、ルーの側から関係を絶ったからだ、と説明しているのも、ルーの自伝である (LAS: p.85)。これに対し、ニーチェ自身の書簡草稿は、もっとニーチェの「全哲学」の本質に関わる何らかの問題のゆえに、ニーチェの側から関係を絶ったと語っている。二人の決裂の原因に関する疑問は、このいずれの説明に信憑性を認めるかの問題に帰着する。

要するに、ルー事件についての通俗的理解は、ルーの発言を無条件に信用して組み立てられている箇所さしかかると、途端に他の各種の証言との食い違いを生じるのである。とすれば、我々はここで根本的な疑問に直面せざるをえない。そもそもルーはニーチェとの関係について、どの程度の真実を語っているのだろうか。とりわけ第3の問題に見られるように、ルー自身が状況によって自在に発言内容を変えているという事実を目の当たりにすれば、我々は彼女の証言の信憑性を疑う十分な理由を持っていると言わねばならない。

ルーが時にいかに不誠実な態度をとる場合があるかを見せてくれる実例を挙げよう。彼女がタウテンブルクでニーチェと毎日深夜まで濃密な時間を過ごしていた時、じつはニーチェには秘密でパウル・レーと手紙を交わしていたことはすでに述べた (ちなみに、この行為自体、彼女がニーチェとパウル・レーとの間には純粹に知的な「三位一体」の関係だけを求めていた、という自伝の記述と明白に食い違っている)。このやり取りの中でパウル・レーは、ルーと一緒にいることができない悔しさを切々と訴えており、そして二人は離れていても可能なかぎり同じ時を過ごした気になれるようにと、日記の形で身辺の出来事を知らせあっていた。ルーはこの日記の中で、ニーチェとの深夜までの対話のことについても知らせており、例えば次のよ

うに書いている。

私たちはこの3週間というもの、文字どおり死ぬほど語りあっています〔Wir sprechen uns diese 3 Wochen förmlich todt〕。そして、奇妙なことに、今になって突然、〔頭痛に苦しんでいたはずの〕彼が、1日に10時間しゃべりつづけるのに耐えられるようになったのですよ。〔……〕私たちは完全に親密なのでしょうか？ いいえ、断じてそうではありません。ほんの数週間前にはまだニーチェを有頂天にさせた私の感覚についての、〔ニーチェが抱いた〕思いの影のようなものが、私たちを分かち、私たちの間に割り込んできているのです。そして、私たちの本質のどこか隠れた深みにおいて、私たちはお互いに、いくつもの世界を隔てたぐらい離れているのです——。〔……〕奇妙なことに、私たちはいつか敵として向かい合うことすらありうるかもしれない、という思いが、最近になって私を突然貫いたのです。(Pfeiffer 1970: n.151 ; LAS: pp.84,341)

「文字どおり（単なる言葉の綾ではなく本当に）死ぬほど」という言い方に、毎日10時間も喋りに喋りつづけるニーチェにルーがほとんど辟易している様子が伺われる。ニーチェの側は信頼しきってありつたけの思いを吐露しているが、ルーの側はそれに辟易し、違和感をつのらせている、という図がはっきりと読み取られる。そして重要なことは、自分はやがてニーチェの仇敵となるかもしれないと直感するほど強い違和感をニーチェに対して感じているにもかかわらず、それをルーがニーチェに微塵も気づかせなかったことである。タウテンブルク滞在を終えた9月9日づけのオーファーバック宛の手紙で、ニーチェは書いている。

私がこの夏にした最も有益なことは、ルーとの対話でした。私たちの知性と趣味とは最も深いところで親縁関係にあるのです——もちろん他方では、対立もたくさんあって、私たちはお互いに最も教えるところの多い観察対象であり、観察主体なのです。(KSB 6: pp.255-256)

ここでニーチェが語っている「対立」は、ルーが語っている「敵」とはまったく意味がちがいが、あくまで親縁性を前提とした対立関係であるのは言うまでもない。たしかにルーもまたニーチェを入念な観察の対象としただろう。その結果、彼女は何を見て取ったか。はるか後年のルーはこう語っている。

残忍な人間が常にマゾヒストでもあるかぎりにおいて、その全体はバイセクシュアリティと関係している。そしてそれは深い意味を持っている——。私が生涯で最初にこのテーマについてひとと議論しあった時、その相手はニーチェ（このサドマゾヒストの権化〔dieser Sadosochist an sich〕）だった。そして、それ〔この主題について語って〕以後というもの、私たちはお互いに正視しあう勇気がなくなったことが、私にはわかるのだ。(LAS-Freud: pp.155-156)

死去して十数年がたち、もはや何を言われても怒ることも反論することもできない相手に対して、このような言葉を語るという態度の是非については、ここでは問うまい。ただここで確認しておくべきことは、ルーが当人の面前と、当人の見ていないところ（ないしは見るのが不可能なところ）とで、まったくちがうことを語る場合があるという事実である。

このように見てくれば、我々の第1の疑問、つまり、ニーチェがルーに会うなり「どんな星の導きで私たちはここで出会ったのでしょうか？」と言ったというのは本当か、という疑問への答も、おのずと導かれてくる。ルーの自伝以外の数々の資料は、ルーに出会った当時のニーチェが恋愛への関心など消し飛んでしまうほど重い病苦に苦しんでいたこと、そもそも彼は若い頃から女性全般への性的関心を欠いており、ルー個人に対しても実際に会う前にはきわめて投げやりな興味しか抱いていなかったことを、はっきりと示している。これらの証言すべてを退けて、ニーチェが初対面のルーにいきなり言い寄ろうとしたかのように語るルーの説明の方を信ずる必然性は、何もない。

3.3. ニーチェがルーとの交際を渴望した理由

以上の検討によって、ニーチェはルーに言い寄ることも、求婚することもなかったということ、つまり彼は恋愛関係を求めてルーに接近したのではなかったということが、見えてきた。しかし、それでは彼は、いったいなぜルーとの交際をあれほど渴望したのだろうか。彼がタウテンブルクで深夜まで彼女と二人きりでいたのも、愛の語らいに時を忘れていたのでないとしたら、では彼は二人きりでルーを相手に何をしていたのだろうか。この点について明らかにしておくことは、第4の疑問に解決の糸口を見出すための不可欠の前提条件をなす。なぜなら、ニーチェがルーに何を期待していたのかが明らかになって初めて、なぜ彼がその期待を裏切られたと感じ、ルーと決別することを決意したのかもまた、理解できるようになるからである。

ニーチェが「私の全哲学」をルーに教えようとしたのに、こんな仕打ちを受けるとは心外だ、という意味の手紙を書こうとしていたことは、すでに確認した(2.4節)。ルーと出会って2ヶ月ほどの時のルー宛の手紙では、彼は次のように書いている。

私はすぐにあなたと一緒に仕事をし、研究をしたいという気持ちでいっぱいです。私はすばらしいものを準備してあるのです——泉を見つけることができる領地をね。ただし、あなたの目に、まさしくそこに泉を見つける意欲があるならば、の話ですけれど（私の目はそれができるほど新鮮ではもうなくなっています！）ご存知でしょうか、私はあなたの教師でありたい、学問的生産への道程であなたを導く道しるべでありたい、と願っているのです。(an Lou, 1882/6/18, KSB 6: p.206)

ここでニーチェが言っている「すばらしいもの」とは、1年ほど前に彼のもとを天啓のよう

に訪れた永遠回帰思想のことを意味しているのは言うまでもない。永遠回帰体験以後、ニーチェの哲学が永遠回帰思想を極点とし、永遠回帰思想を軸として回るようになることを考慮すれば、彼がルーに自分の「全哲学」を教えようとしたと言っているのもまた、永遠回帰思想を中核とする彼の哲学の全体を教えようとした、ということの意味しているのは間違いない。

彼はこれに先立つ数年間を、3歩先すら見えない、1日に20分以上読み書きできない、というほどの視力低下や、3日間ぶっ続けで激しい頭痛や嘔吐に見舞われるといった、重い病気をかかえながら生活してきた。そういう中で、彼は常に自分の「死」——生物学的な死はもちろん、それ以上に彼にとっては致命的な、視力を失うことによる学者および思想家としての死——を予感しており、とりわけ『人間的、あまりに人間的』の3部作を公刊した時期には、本気で自分の死は間近に迫っていると感じていた。こうした極限の苦悩から彼を救済し、彼に再び生を肯定することを可能ならしめたのが、ほかならぬ永遠回帰の洞察であった。永遠回帰体験の直後は、彼は感激のあまり毎日目を泣き腫らしてしまい、恥ずかしくて日課にしていた散歩に出ることもできない有様だった、と彼はケーゼリッツ宛の手紙に書いている⁽⁸⁾。

しかし彼にとっては永遠回帰思想は、生の問題の最終的な解決という喜びの源泉であると同時に、彼のような苦悩を体験したことのない者には決して理解されえないであろうという絶望の源泉でもあった。すでに2.1節でも引用したように、彼はこの思想を著作にまで仕上げるのに「10年」の歳月をかけようと計画していた。それは、不用意な形でこの思想を語ったら、まったくの荒唐無稽な妄想として一蹴されてしまうしかないということ、彼は充分に知っていたからである。ところがそこに突如として、一を聞いたら十どころか二十も三十も知ってしまうような、驚くべき鋭敏な知性を持った女性が現われた。具体的な会話の内容はもちろん知るすべもないが、おそらくニーチェが永遠回帰思想をわずかにほのめかすようなことを語っただけで、ルーはニーチェが考えようとしているのと見事に一致する結論をそこから導き出してみせた、というようなことが、何度もあったのではないだろうか⁽⁹⁾。ルーに宛てた手紙の次の文章は、こうしたニーチェの驚きと感激をよく表わしているだろう。

私もいまや、曙光に包まれています、印刷されてない方の話ですけれどね！ 私がもはや決して信じなくなっていたこと、つまり、私の究極的な幸福と苦悩の友を見出すということが、いまや可能に思えてきたのです——私の未来の全生涯の地平線上にのぼってきた黄金の可能性としてです。私の愛するルーの、勇敢な、予感にあふれた魂のことを思うたびに、それだけで私は感動するのです。(an Lou, 1882/6/7, KSB 6: p.201)

ニーチェは、自分の「命」——生物学的生命とともに、思想家としての生命——が、あまり長く残されてはいないことを予感していた（実際、彼が精神的覚醒をもった生命を維持しえたのは、あと6年あまりにすぎない）。彼は人類史的意義を持つとみずから確信していた永遠回

帰思想が、自分の死とともに永久に無に帰するのには耐えられなかった。だから彼は、是が非でもルーに、自分の永遠回帰思想の「相続者」になってほしいと願ったのである。

私は、あなたの教師であれたらいいと願っています。結局、本当のことを全部ぶちまけてしましますが、私は今、私の相続者であることができる人間を探しているのです。私は、私の著作の中では断じて読むことのできないいくつかのものを、いつも心に持っているのです——そして、それを耕すための、最も美しい、最も実り多い耕地を、探しているのです。(an Lou, 1882/6/26, KSA 6: p.211)

ニーチェがタウテンブルクで、毎日深夜まで、1日10時間も、いったい何を語っていたのかは、このように考えてくればもはや明らかであろう。そして、彼がルーという魅力的な女性を目の前においても、恋愛や結婚という観念など、頭の片隅をよぎりすらしなかった理由も、このように考えることで理解できる。なぜなら、この時のニーチェにとって、ルーに永遠回帰思想を伝えることは、死を間近にした自分がそれまで生きてきた意味のすべてを賭けて行なう一大事業だったからである。

3.4. 決裂の理由の推測

しかしニーチェは、これほどまでに信頼していたルーに対して、突如として激怒し、彼女との交際を絶つに至った。この決裂の理由について、ルーとニーチェがまったく噛み合わない発言をしているのを、どう理解すればよいか、というのが我々の第4の疑問であった。本節ではこの問題について考えてみよう。

二人の人間が喧嘩をする時、必ず同一の問題をめぐる対立が生じているとはかぎらない。AはBの不正な行為を非難し、Bは自分の行為は不正ではないといって反論する、というなら二人の対立は噛み合っているが、Bが単に、自分を非難する人がいることそれ自体に腹を立てているとしたら、二人の対立はまるで噛み合っておらず、したがって解決することはありえない。しかし、こういう噛み合わない対立は世間ではありふれたものであり、ニーチェとルーの対立もこういう性質のものだったと考えれば、両者の発言が噛み合っていないことを特別に問題視する必要はないように見えるかもしれない。

しかし、少し注意して吟味してみれば、そんなに簡単に問題を片付けてしまうのは問題回避にすぎないということがすぐに見えてくる。私は私の「全哲学」をあなたに教えようとしたのに、あなたは私を裏切った、という意味のことを綴ったニーチェの書簡草稿を、我々はすでに引用した(2.4節)。ここで注意する必要があるのは、これはニーチェがルーに読ませるつもりで書いた書簡草稿だということである。もしもルーが自伝で述べているように、パウル・レーをおとしめようとするニーチェの言動を彼女が非難し、それに対してニーチェが激怒したのだとしたら、ニーチェは少なくともパウル・レーに対する自分の言動について、それは正当だと

主張するなり、あるいは自分はそんなことは言っていないと反論するなり、とにかく何らかの
 ことを書くはずであって、自分の「全哲学」という、それとはまるで無関係なものについて声
 高に主張することなど、ありえない。しかもこの手紙は、ルー本人しか読まないという前提で
 書いている以上、ニーチェがここで第三者の目を気にして問題の所在をごまかしている可能性
 もない。彼は問題の核心だと自分が考えている点をストレートに突いている、と我々は前提し
 てよい。したがって、もしもパウル・レーに対するニーチェの態度をルーが非難したことが実
 際にあったとしても、ニーチェにとってはそれは、怒る必要も反論する必要もない些細な出来
 事にすぎず、これほど声を荒げてルーを攻撃する原因となるような問題ではなかったと考えな
 ければならない。彼は、自分の哲学を侮辱する何らかの言動をルーが行なったことを捉えて、
 このように激怒しているのである。

自分の哲学を傷つけるものでないかぎり、ルーの相当に傲慢な態度に対してすらニーチェが
 意外なほど寛容であった実例を、イェナでの騒動に見ることができる。彼は、ルーが彼のこと
 をエリーザベトにむかって口汚くののしった、という事実を知らされても、それが彼の哲学を
 侮辱するものでないかぎりは、一時的には苦悶しても、冷静さを取り戻せば彼はそれを容易に
 許すことができたのである。次に引用するのは、イェナでの出来事をニーチェに知らせたのに、
 彼があまりにも簡単にルーを許してしまったことに腹を立てた妹に対して、機嫌を直すように
 とニーチェが書いた手紙の中の一節である。

この〔イェナでの〕場面の騒動から、それがなければたぶん長いこと暗闇の中にありつづけたら
 うことに、光が当たりました。つまり、ルーが私のことを、〔私が思っていたより〕もっと見下して
 いたということ、そして、私に対するいくつかの不信を抱いていたということです。そして、我々が
 知り合った事情のことをもっと正確に思い返してみれば、彼女がそう思ったのにもたぶん十分な理由
 があったのです（友人レーのいくつかの不注意な発言の影響を考慮に入ればね）。しかし、今では
 彼女はきわめて確実に、私について以前よりも好意的に考えるようになりました——そして、それ
 そが大事なことなのですよ、ちがいますか、わが愛する妹よ？（1882/9/9, KSB 6: p.254）

妹に嘔吐と痙攣を起こさせるほどのひどい悪罵をすら、このように許すことができたニー
 チェが、絶対に許すことができなかったルーの行為とは何か。以上の考察に基づいて考えれば、
 それは、ニーチェが命懸けで守ろうとした、ほかならぬ永遠回帰思想を、嘲笑するような、愚
 弄するような、何らかの発言であったと考えるしかないであろう。それだけではない。2.4節
 で引用された決裂直後の書簡草稿の言葉を想起しよう。ニーチェはこう言っていた。「あなた
 は損害を与えた。あなたは苦痛を与えた——しかも、私に対してだけでなく、私を愛していた
 すべての人々に対してです。——この剣が、あなたの上に釣り下がっているのです。」（KSB 6:
 p.293）単に永遠回帰思想が荒唐無稽だとか、理解不可能だとかと言っただけでは、ニーチェ

を愛するすべての人々を侮辱することにはなるまい。もっとニーチェの人格的尊厳を全面否定するような形で、例えば、永遠回帰思想をニーチェの性的無関心と関係づけて、永遠に同一の生の重荷を担い続けることを喜ぶなどというアイデアはマゾヒストに類する異常性欲者だけが考えつくことだ、といったようなことを、ルーが言った可能性を推定せざるをえないであろう。

もちろん、これはあくまで既存の資料にもっともよく整合すると考えられるひとつの仮説にすぎず、実際にこういうことがあったという確証はどこにもないことには、十分注意しておく必要がある。ただ、ルーを性的関心の対象とはまったく見なしていなかったニーチェにとって、彼女との決裂は「失恋」という概念に包摂されるような出来事ではまったくなかったということだけは、確認しておく必要がある。彼にとってルー事件は、単なる恋愛沙汰では決してなく、彼の哲学の尊厳に関わる出来事だったのである。

3.5. ルーの動機について

残された第3の疑問の解明に移ろう。ルーは自伝で、自分に恋愛関係や結婚を求めたのはニーチェの側であり、自分は純粹に知的な関係だけを求めていたように書いている。ところが自伝の編集者が記録している発言では、モンテ・サクロでニーチェとキスを交わしたこと（つまり恋愛関係があったこと）を、むしろ積極的に匂わせようとしている。この矛盾への疑問が、我々の第3の疑問であった。

しかしこれまでの解明によって、ニーチェはまず間違いなくルーに求婚などしなかったということが明らかにされた。むしろニーチェの側こそ、恋愛や結婚を度外視した純粹に知的な関係をルーとの間に求めていたのである。もしルーもまた知的関係しか求めていなかったのだとしたら、その点では両者は完全に一致しているのだから、そこに求婚だのキスだのという話が出てくる余地はなかったはずである。いったいなぜルーは、元来は影も形もなかったはずの求婚やキスという要素をわざわざ付け加えてニーチェとの関係を語ろうとするのだろうか。本論文のこれまでの解明を背景として、第3の疑問は以上のように定式化しなおされることになる。

この疑問に、万人が承認しうるような答を与えることは、おそらく不可能である。なぜならこの問題は、ルー個人の心理的動機をめぐる問題であって、それに答えることができるのは最終的にはルー本人以外にはありえないからである。彼女はニーチェが求婚してきたと断固として主張しており、自分がニーチェとの関係に恋愛の要素を付け加えて語っているとは決して認めていない以上、彼女の口から彼女の動機を聞くことができない我々には、事態の真相は永久に閉ざされている。晩年は精神分析学者として活躍したルーなら、自分自身の深層心理について誰よりも的確に解明することができたのかもしれないが¹⁰⁾。

しかし、少なくとも次のようなことまでなら、一定の確実性をもって結論することができるであろう。ニーチェという人物と関わりをもったひとりの女性が、この関わりについて他人に

説明する必要があり、その際に、「永遠回帰思想の相続者であることを求められた」という説明と、「結婚を求められた」という説明とがいずれも可能である場合に、前者の説明の方を好み、前面に押し出そうとする女性がいたとしても、不思議ではない。そういう人は、ひとりの「女性」として、恋愛や結婚の対象と見なされることよりも、ひとりの「哲学者」として、深い思想の理解者と見なされることの方を、より価値が高い、誇らしいことと見なす人であろう。ところがルーは、前者の説明が可能であるばかりか事実ですらあるにもかかわらず、あえてそれを退けて、後者の説明をすることの方を好んだのである。ここに、彼女の価値観が明瞭に表われていることだけは間違いない。

4. 終章。ニーチェにとってのルー事件の意味

序論でも述べたとおり、本論文がルー事件の真相に迫ろうとしたのは、この事件それ自体に対する興味のゆえではなく、あくまでニーチェの思想を解明するための不可欠の前提条件を整備するためである。そこで次に我々は、ルー事件がニーチェの思想に何をもたらしたかを考察しなければならない。しかし、残された紙幅でこの課題を十全に果たすのはもちろん不可能であるから、ここではごく大まかな方向性を示唆するだけにとどめ、詳論は別の機会に譲ることにしたい。

ニーチェがそれまで出会った人々の中で唯一、永遠回帰思想の相続者となりうる資質を持っていると信じたルーが、結局はこの思想を理解しなかったばかりか、嘲笑し、侮辱したという経験は、現在の世界に永遠回帰思想を理解しうる人間はひとりとして存在しない、という認識をニーチェの心の奥底に刻みつけただろう。今後10年間をかけて永遠回帰思想を著作へと仕上げることをライフワークとする決意を固めていた彼にとって、これは彼の人生を賭けた仕事が無駄であるという宣告に等しかっただろう。この絶望から脱出する道を、彼はどこに見出したか。結論だけを端的に述べれば、それは、永遠回帰思想を現在の人間に与えることを全面的に断念し、この思想を受け入れる能力を欠いた現在の人間が総じて「没落」したあとの未来に初めて訪れるであろう、より高等な人間に、この思想を委ねる、という道である。一言で言えば、「超人」の思想こそが、ルー事件の体験がニーチェにもたらした果実だったのである。

ニーチェの遺稿を年代順に読んでいくと気づくことは、1882年11月から1883年2月までの覚え書きを記したノート（KSA 10: pp.109 sqq.）、つまりちょうどルーとの決裂の時期から書き始められたノートに入ると、突然「超人」という語が頻出し始めることである（op.cit.: pp.115,134-138,143-145, etc.）。それ以前には、1882年夏から秋にかけてのノートに一度、用例が見られるだけで（op.cit.: p.100）、それ以前に登場する「超人」の語はすべて、『ツァラトゥストラ』で用いられているのとはちがう、ごく一般的な意味での表現にすぎない。超人思想の源泉がルー体験にあるという結論は、ニーチェの遺稿からも立証されうるものである。

このように解することによって、『ツアラトウストラ』を単純に読んでいただけでは不明瞭な、「超人」思想と「永遠帰郷」思想との関係は、一義的に理解できることになる。ルー事件を単なる恋愛スキャンダルと見なして済ませているかぎり、『ツアラトウストラ』という書の真の意義は決して理解することができないのである。

私がこれまで持ってきた交友の中で、ルーとのそれは最も価値の大きい、帰郷の豊かなものです。この際以後になって初めて、私は私のツアラトウストラ〔を書けるほど〕にまで成熟したのです。(an Elisabeth, 1884/1? 2?, KSB 6: p.467)

【注】

- (1) そもそもニーチェに関する真に客観的な伝記は、日本においてだけでなく世界的に見ても、まだ存在しないのが実情である。ドイツでニーチェに関する標準的な参考書であることを目指して編集された Nietzsche Handbuch でも、ニーチェが求婚して断われ、自殺するか、恋敵のパウル・レーと決闘するかで呻吟した、という俗説がそのまま典拠もあげずに掲載されている。Cf. Chr. Niemeyer: "Nietzsches Leben", in: N.Handbuch, p.28. —出版当初以来ルーに関する信頼できる伝記として無数の著作・論文で参照されてきたペーターズの伝記も、我々が「通説」と呼んだのとまったく同じ物語を記述している、しかも、まるでそれらのシーンを横で見ていたかのように生き生きとした心理描写を加えながら、ただし、本論文が問題にしているような決定的な箇所に関しては典拠をまったく示さぬままで (ペーターズ 1985: 第二部「鷲と蛇」, pp.75-141)。—もう少し典拠に即して事件をたどろうとしているのは、ハイデガーやショーペンハウアーの伝記で著名なリュディガー・ザフランスキーによる伝記であろう。しかしここではルー事件は、ニーチェの同性愛の可能性や、妹との近親相姦の可能性などについて語っているのと同じ章で、「個人をその性生活から解明する」という関心のもとで、描かれている (ザフランスキー 2001: pp.269-284)。—基本的には同趣旨の物語を、しかしはるかに学問的に、豊富な典拠を示しながら描いているのは、Web上に公開されているヘルムート・ヴァルターの講演である。Cf. Walther-Lou. ちなみにこれはPDF版のURLだが、このファイルの掲載されている同氏のサイト Nietzsche-Hauptseite (www.f-nietzsche.de) にはHTML版もあるほか、ニーチェをめぐる豊富な資料が公開されており、非常に参考になる。ただし、ルー事件に関するかぎり、本論文が提示したような疑問点はまったく問題としておらず、型どおりの通説をなぞるに終始している。
- (2) 本論文では慣例どおり、人名は初出時を除いて姓だけを用いるが、すでに "Lou" という呼び方が定着しているザロメ嬢を「ルー」と呼び、Paul Rée を原則どおりに「レー」と呼ぶと、「ルー」と「レー」という日本語では発音も文字面もよく似た二つの名前を使うことになる。これに起因する混乱を未然に防ぐため、「パウル・レー」だけは例外的に姓名をあわせて用いることにする。
- (3) 一部では、少し前にパウル・レーもまたルーに求婚しており、二人の一方だけを選ぶわけにいかず苦渋した彼女は結局両方とも断わった、という説明がなされている。Cf. Niemeyer: ibid. しかし、まるで彼女が二人に対する公平さを重視しているかのようなこういう理解には、それを立証する典拠がない。おそらくこれは、「私たちの三位一体を危険にさらすことなしに」事態を切り抜けようとした、というルーの説明 (LAS: p.80) を、「二人を差別したくなかった」という意味に解しているのだろう。しかしそういう理解は、ニーチェの求婚を断わる理由をルーがパウル・レーと一緒に考えた、という同じ箇所の記述と明らかに矛盾する。ルーの説明は、自分は三位一体での知的探求を求めていたのであってそこに恋愛だの結婚だのは介在させたくなかった、という意味に解さなければならない。
- (4) これとは別の説明をとる人もある。ニーチェはルーと交際するうちに次第に彼女を「下僕」のように扱うようになり、それにルーは反発したのだ、云々 (cf. Carol Diethe: "Frauen", in: N.Handbuch, p.51)。しかしこの理解にも明確な典拠はない。本論文の現在の箇所が問題にしているのはあくまでルー事件に

関する「通説」であるが、何の典拠もない単なる「風説」にまでいちいち反論している余裕は我々にはない。明確な典拠に基づいた通説としては、当事者であるルーの自伝の記述に依拠する通説を挙げなければならない。

- (5) ちなみに、この最後の言葉 "Er fürchtete, Fr. Salomé könne dies für einen Antrag gehalten haben" をベン＝アミ・シャルフステインは、「彼はザロメ嬢がこの言葉を求婚と見なしてくれなかったのに気づいた」(he found Mlle Salomé did not take these words for a marriage proposal) と訳した上で、これをニーチェが求婚した証拠として挙げているが、もちろんこれは誤訳である (cf. Scharfstein 1989: p.295, fn.)。
- (6) Cf. Pfeiffer 1970: nn.140,141,143,145,148,149,151,157-159. 邦訳：プファイファー 1999.
- (7) ウォルター・カウフマンは、Binion 1968 に依拠しつつこう述べている。ルー事件に関する説明は、エリーザベトのそれと、ルーのそれとの2つのバージョンがあり、従来は前者が捏造で後者が真実だと信じられてきた。しかしビニオンの研究によって、今ではルーの説明もまた捏造であることが判明している。ニーチェはルーに求婚などしなかった、むしろルーの方が求婚されるのを待っていたのだ (Kaufmann 1974: pp.49 sqq.)。——しかし、ウィリアム・ビーティ・ワーナーは、こうした論はニーチェを天才哲学者としてあがめようとするあまり他人からの影響を全面否定しようとする独断だとして一蹴している (cf. Warner 1986: Chap.2)。——デボラ・ヘイデンもカウフマンに反論している。カウフマンはビニオンを軽率に誤読している、ビニオンにはルーの証言を簡単に退ける意図などない、彼はルー事件の (パズルの) ピースがこんなにも噛み合わないのはなぜかという問いを提起しようとしているだけなのだ、実際、ルーに関する現在の伝記は再びニーチェがルーに求婚したことを承認している、云々 (Hayden 1999: pp.301-302)。——事実、ルーに関する最も新しい伝記のひとつであるジュリア・ヴィツカーズの伝記は、ビニオンの問題提起をあさりと退けて、ニーチェがルーに求婚したという物語を描いている (Vickers 2008: pp.40 sqq.)。——要するに、ビニオンやカウフマンの結論は、本論文が現在の「通説」と呼んだものに対してまったく影響を与ええなかったのである。それゆえ本論文は、単にビニオンやカウフマンの所説を補強するということにとどまらず、通説を全面的に再検討するという方法をとることにしたのである。
- (8) 煩雑を避けて本段落の参照箇所は本注で一括して示す。「痛みなしに読み書きできるのは20分だけ」: Brief an Carl Burckhardt, 1879/5/2, KSB 5: p.411. 「3昼夜」にわたる激しい頭痛と嘔吐: Brief an Otto Eiser, 1880/1/?, KSB 6: p.3. 死の予感。今年の秋には一緒に暮らしましょう、もし私が生きていれば、の話ですが: an Köselitz, 1879/6/5, KSB 5: p.415. 永遠回帰体験への感激: an Köselitz, 1882/8/14, KSB 6: p.112.
- (9) 実際、ルーはタウテンブルクからパウル・レーに宛てた手紙の中で、「私たちはほとんど、ひと言半で理解しあえてしまいます」と書いており、ニーチェがルーの理解の早さに驚いて、「私たちの唯一のちがいは年齢のちがいがだけだ、私たちは同じように生き、考えてきたのだと思う」と言った、ということを報告している。Cf. Pfeiffer 1970: n.151.
- (10) ヨアヒム・ケーラーは、自伝を書いた当時すでにフロイト門下生だったルーには、父親の代理役を見つけて出して誘惑しては捨てるという自分の性癖がよく理解できたからこそ、それを隠すために虚偽のシナリオを立てる必要があったのだ、と解している (ケーラー 2008: pp.496-497)。他の点ではまともに反論する価値すらないこの芸能週刊誌並みのニーチェ伝の、あるいは唯一の卓見かもしれない。

【引用・参考文献】

本文および注での文献の指示は、以下のリストに示す略号を用いる。煩雑な注を付すのを避けるため、単純に巻数・ページづけを示すだけの注記は本文中に埋めこんだ。

- Binion 1968: Rudolf Binion: *Frau Lou. Nietzsche's Wayward Disciple*. Princeton University Press, 1968.
- FNChrBT: Raymond J. Benders, Stephan Oettermann, et al. (Hrsg.): *Friedrich Nietzsche. Chronik in Bildern und Texten*. Deutscher Taschenbuch Verlag, 2000.
- Hayden 1999: Deborah Hayden: "Nietzsche's Secrets", in: Jacob Golomb, Weaver Santaniello, Ronald Lehrer (Eds.): *Nietzsche and Depth Psychology*. State University of New York Press, 1999.

- Ida 1908: Ida Overbeck: "Frau Overbeck über das Lou-Erlebnis", in: Carl Albrecht Bernoulli: *Franz Overbeck und Friedrich Nietzsche. Eine Freundschaft.* 2 Bde., Eugen Diederichs, 1908. (jetzt verfügbar online, Bd.1 : <https://archive.org/details/franzoverbeckun01berngoog>) : Bd.1, pp.336-351.
- Kaufmann 1974: Walter Kaufmann: *Nietzsche. Philosopher, Psychologist, Antichrist.* 4th Ed., Princeton University Press, 1974.
- KSA: *Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden.* hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1980.
- KSB: *Friedrich Nietzsche Sämtliche Briefe. Kritische Studienausgabe in 8 Bänden.* hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1986.
- LAS: Lou Andreas-Salomé: *Lebensrückblick. Grundriß einiger Lebenserinnerungen.* Aus dem Nachlaß herausgegeben von Ernst Pfeiffer. Neu durchgesehene Ausgabe mit einem Nachwort des Herausgebers. Suhrkamp Verlag, 1994.
- LAS-Freud: Lou Andreas-Salomé (Hrsg.: Ernst Pfeiffer) : *In der Schule bei Freud.* 1958.
- N.Handbuch: Heinrich Ottmann (Hrsg.) : *Nietzsche-Handbuch. Leben - Werk - Wirkung.* Verlag J.B. Metzler, 2000.
- Pfeiffer 1970: Ernst Pfeiffer (Hrsg.) : *Friedrich Nietzsche, Paul Rée, Lou von Salomé. Dokumente ihrer Begegnung.* Insel Verlag, 1970
- Scharfstein 1989: Ben-Ami Scharfstein: *The Philosophers. Their Lives and the Nature of their Thought.* Oxford University Pres, 1989.
- Vickers 2008: Julia Vickers: *Lou von Salome: A Biography of the Woman Who Inspired Freud, Nietzsche and Rilke.* McFarland Inc., 2008.
- Walther-Lou: Helmut Walther: "Scherz, List und Rache. Die Lou-Episode: Friedrich Nietzsche, Paul Rée und Lou Salomé." Vortrag vor der Gesellschaft für kritische Philosophie Nürnberg vom 30. Mai 2001. <http://www.f-nietzsche.de/lou.pdf> (last accessed August 1. 2015) .
- Warner 1986: William Beatty Warner: *Chance and the Text of Experience: Freud, Nietzsche, and Shakespeare's Hamlet.* Cornell University Press, 1986.
- Westerhagen 1956: Curt von Westerhagen: *Richard Wagner. Sein Werk, sein Wesen, seine Welt.* Atlantis Verlag, 1956.
- ケーラー 2008: ヨアヒム・ケーラー／五郎丸仁美訳『ニーチェ伝 ツアラトウストラの秘密』青土社、2008年。原著: Joachim Köhler: Zarathustras Geheimnis. Friedrich Nietzsche und seine verschlüsselte Botschaft. Eine Biographie. Rowohlt Taschenbuch, 1992.
- ザフランスキー 2001: リュディガー・ザフランスキー／山本尤訳『ニーチェ その思想の伝記』法政大学出版局、2001年。原著: Rüdiger Safranski: Nietzsche. Biographie seines Denkens. Carl Hanser Verlag, 2000.
- ザロメ 2006: ルー・アンドレーアス ザロメ／山本尤訳『ルー・ザロメ回想録』自伝文庫、ミネルヴァ書房、2006年。原著: LAS.
- ブファイファー 1999: E. ブファイファー／眞田収一郎訳『ニーチェ・レー・ルー 彼等の出会いのドキュメント』未知谷、1999年。原著: Pfeiffer 1970.
- ペーターズ 1985: H.F.ペーターズ／土岐恒二訳『ルー・サロメ 愛と生涯』筑摩書房、1985年新装版第2刷。原著: Heinz Frederick Peters: My Sister, My Spouse. A Biography of Lou-Andreas Salomé. Victor Gollanca Ltd., 1963.

【2015年9月4日受付, 10月26日受理】

Hat Nietzsche Lou von Salomé wirklich Heiratsantrag gemacht?

Takashi NAKAHARA

Friedrich Nietzsche schrieb den ersten Teil seines Hauptwerks *Also sprach Zarathustra* fast unmittelbar nach dem Bruch mit Lou von Salomé. Aus dieser Tatsache sollte man natürlich schließen, dass das Ereignis des Bruchs einen tiefen Einfluss auf den Gedanken von *Zarathustra* ausgeübt habe, und dass das richtige Verständnis dieses Buches unmöglich wäre, wenn man das Verhältnis Nietzsches mit Lou bloß als durchschnittliche Liebesaffäre abtäte. Dieser Aufsatz versucht, durch sorgfältige Überprüfung der Quellen, allgemein anerkannte Ansichten über „Lou-Affäre“ umzuwerfen, und folgende Schlüsse ziehen: 1. Die Tatsache des Antrags Nietzsches an Lou gibt es durchaus nicht. 2. Die Zeugenaussagen Lous über den Verkehr mit Nietzsche sind im Allgemeinen unglaubwürdig. 3. Nietzsche erwartet von Lou, dass sie den „Erben“ der Lehre von ewiger Wiederkunft sein werde. 4. Es ist rational anzunehmen, dass Nietzsche das Verhältnis mit Lou darum abgebrochen habe, weil sie den Wiederkunftsgedanken beleidigte oder verspottete. 5. Dass Lou das Verhältnis mit Nietzsche gewaltsam als Liebesverhältnis erklärte, hat seinen Grund darin, dass sie nicht als eine Philosophin, sondern als eine attraktive Frau geschätzt sein wollte. — Aus diesen Schlüssen gibt dieser Aufsatz schließlich eine Aussicht, dass der Gedanke von „Übermenschen“ in *Zarathustra* als eine Konsequenz des Lou-Erlebnisses Nietzsches erklärt werden kann.